

9年目の福島、34年目のチェルノブイリ

～眼に見えないリスクを人々はどう生きるのか？

発表者 村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

河野暁子（立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程）

東日本大震災の原発事故より毎年、福島を訪れ、「被災と復興の証人になる」ことを目指して、フィールドワークを行ってきた。8年の変化を感じながら、去年は、「福島県環境創造センター交流棟（コミュタン福島）」を見学し、2017年4月に避難解除された飯館村を訪れた。環境回復や復興など明るい展望が強調される一方、避難解除され、たくさん子どもたちが新しいグラウンドでサッカーをするすぐ裏の林では高い放射線量を示すという現状があった。今後、これらの場所でのどのようなことが展開していくのか、一定の時間経過を経たチェルノブイリでは、どのような過程を辿り、今どうなっているのか知りたいと思った。

2019年9月、発表者らはウクライナへ行き、「チェルノブイリ博物館」を見学し、原発事故立ち入り禁止区域に入る「チェルノブイリツアー」に参加した。ウクライナ政府はチェルノブイリの観光地化政策をとり、今年5月に放映されたアメリカのTVドラマ「チェルノブイリ」の反響もあって、ツアー客は6倍になったという。実際、そこには多くの観光客が訪れ、あちこちにフォトスポットがあり、土産ショップさえあった。しかし、立ち入り禁止区域には、今なお高い放射線量を示し続ける場所があり、博物館は、原発事故の悲惨さや放射線被害の恐ろしさを伝えていた。

Figley (1985) は被害者がサバイバーになるプロセスを、(1)破局 (2)安堵と混乱 (3)回避 (4)再考 (5)適応の段階に分けた。原発事故後、放射線という見えないリスクに対して、私たちはどのようにして生きているのだろうか。人間の時間に比べて、放射線の時間は長い。時間経過は原発事故被災地と人々に何をもたらすのだろうか。

ワークショップでは、9年目の福島、34年目のチェルノブイリで経験したことを紹介し、それぞれの地で今、何が起きているのか、これからどのような方向が期待できるのかについて参加者と一緒に考えてみたい。